

わが校自慢

白岡東小学校

毎年、子どもたちも職員も楽しみにしている秋の全校徒歩遠足を紹介します。

異年齢からなる縦割り集団を組織して、東武動物公園までウォークラリーをします。1年生から6年生までの子どもたちが小さなグループになり、リーダーシップを発揮する高学年、進んで協力しようとする中学年、それらを見習いながらいっしょに活動する低学年が、発達段階に応じた役割を分担し、協力しあって、よりよい人間関係を築くのに成果をあげています。

A・B2コースそれぞれ5kmほどの道のりにチェックポイントが10カ所ずつ設置され、楽しい問題を解きながら、子どもたちは、さわやかな秋空の中、豊かな地域の自然を思う存分に感じて歩きます。また、PTAの校外指導委員のお母さんに途中交通指導をいただいたり、地域のかたがたの温かい声援に励まされたりして、ようやくゴールにたどりつくのです。

1年生にとっては厳しい距離ですが、グループの一人ひとりを気づかう上級生のリーダーシップが光ります。ゴール後みんなで動物を見て回り、いっしょにお弁当を食べ、アトラクションも1つ楽しめたりするので、子どもたちにとっては家族で訪れるのとは違い、新鮮で冒険心に満ちた本校自慢のイベントなのです。



▶ おや、こんな所に問題が... (ウォークラリーのチェックポイントにて)



◀ ぼくらの班はトレインに乗って公園を一周だ(アトラクションお楽しみ中)

—白岡の古道をゆくvol. 4—

見沼の舟運 と しばやまはしど 柴山橋戸

ふるさと

白岡紀行

前回紹介した見沼代用水は、流域と江戸(東京)とを結ぶ舟運のルートとしてもたいへん重要な役割を担っていました。舟運は、井沢弥惣兵衛の手による見沼通船堀(さいたま市)で芝川に入り、芝川から荒川(隅田川)を経て江戸市中を結んでいました。



川辺に見える石倉

明治7年に見沼の舟運を統括する見沼通船会社が設立されると、柴山伏越下流の平野河岸(蓮田市)に子会社が設けられ、伏越を越えるための荷の積み替えが盛んになりました。東京へは主に米、里芋、材木等の農産物が送られ、東京からは塩、砂糖、醤油、肥料などが運ばれてきました。日数は片道2~3日を要したようですが、「さんまの早船」は東京から一昼夜で着船したといわれます。

伏越の北西側には橋戸という集落があります。橋戸は元荒川・野通川と見沼代用水に囲まれ、また騎西・葛蒲と原市(上尾市)を結ぶ「原市道」が通っているため、平野河岸で扱う荷物と周辺地域を結ぶ物流拠点として、明治~昭和初期には繁栄を極めました。鉄道の開通で舟運は衰退してしまいましたが、現在でも「スケダナ」「せんべい屋」「馬力屋」など多くの家に家業の屋号が伝わっています。沿道に商家が軒を連ねる光景からは、売り子のかけ声や船頭の舟歌が聞こえてきそうです。



現在の橋戸地区の様子

